子どもの話を人にするとき

「私がいないと、あの子はダメなのよ」

これは自分の存在によって、子どもが存在することができる、と思っている人の言葉です。私たちは幼いころ、誰かに世話をしてもらうことでしか生きていくことはできませんでした。一人でミルクを作り、オムツを交換する赤ちゃんはいないわけで、幼いころは一人で食事もできなければ、服を着替えること、場所を移動することすらできませんでした。

幼い時期は、全面的に面倒をみてもらわないと、確かに生きてはいけないので、「私がいないと、あの子はダメなのよ」という言葉は、正解なのかもしれません。

でも、いつまでもその時代が続くわけではありません。

いずれは自分で食べ物を食べ、トイレに行き、服を着替えられるようになり、歩いて移動できるようになっていきます。

また、そうできるように躾が始まっていくわけです。

親が子どもに、「自分で着替えなさい」「自分で食べなさい」と言うのは、「あなたは、もうそれができるくらいに成長しましたよ」ということを子どもに教えているわけです。

今まで全面的に面倒をみてもらっていた子どもからすると、「どうして自分でやらなきゃいけないの？」と疑問に感じ、「やってほしい！」と反発をしたりもしますが、それでも一つひとつのことにチャレンジして、できるようになっていくことで、全面的に面倒をみてもらう依存的立場から、少しずつ〝自分のことは自分でできる〟自立というステージに向かっていけるのです。

ところが、「私がいないと、あの子はダメなのよ」と言う親は、自分では意識していなくても、「あなたは、まだ何もできないのよ」「それができるくらいに成長していないのよ」と言っているのと同じなのです。

子どもの話を人にするときに、「私がいないと、あの子はダメなのよ」と言ってい